

りょうぜん天蚕の会だより

【第 19 号】



発行責任者 りょうぜん天蚕の会 会長 菅野秀一（電話・FAX 024-586-3030）

【 当会の活動方針 】 霊山の豊かな自然環境を活かし、野蚕である「天蚕」の育成と、その飼育体験交流や独特の風合いをもつ萌葱色の繭・絹糸の新たな加工や商品化による地域特産品の創成をはかり、活力ある地域づくりを推進する。また、会員一丸となって繭の生産、新商品開発に取り組むとともに、小学校等への観察用天蚕配布、県内外天蚕関係者との交流及び展示PR活動等を行う。

春暖の候、皆様には益々ご健勝のことと存じます。平成17年2月に設立した「りょうぜん天蚕の会」はこの度19年目を迎えました。これも偏に会員皆様の熱心な活動と設立以来伊達市、伊達市観光物産協会、大日本蚕糸会、野蚕学会、福島県関係機関等のご支援の賜と厚く御礼申し上げます。

令和4年度の繭の収穫は山付け総数5,700粒に対し約2,210個でした。館ハウスの昨年改植したハウス4棟が改植後間もなく強風により防草シートが煽られ、エゾノキヌヤナギの幼苗木を痛めてしまうという非常に残念な事態となりました。その他のハウスも今年同時に改植するので7割のハウスが幼木となるので早い生育を待つところです。

当会は天蚕の採卵、飼育、繭加工、糸紬、機織まで一貫した作業活動を行っています。ここ数年来コロナウイルスの感染が拡大していることから今年度も各種行事を縮小せざるを得ない状況ではありましたが「紬」や「経糸掛・綜紬」の研修を行い糸紬、機織の技術向上習得に努めるとともに、地域活動や市内小学校で天蚕繭工芸や養蚕に関する指導等を行いました。

来年は当会設立20周年の記念すべき年を迎えることから会員一同意を新たにさらなる発展を目指し努力したいと思っておりますので皆様のご支援ご協力をお願いいたします。

(会長 菅野秀一)



令和4年7月10日 繭の収穫作業 渡辺美樹子さん、末永敏さん (3頁に詳細)

令和4年度総会開催

3月20日(日) 午後3時より霊山町中川集落センターにおいて会員20名が出席し第18回総会を開催した。菅野会長の挨拶に引き続き伊達市霊山総合支所宍戸康良支所長、福島県伊達農業普及所の小檜山厚所長と藤田智博氏より祝辞をいただいた。議長に大友靖子さんを選出し、3年度事業報告と一般会計報告並びに4年度事業計画、予算案が原案通り承認された。

八島事務局長からの事業報告・計画の説明には会員の積極的な提案があった。今年度も繭の増収と販路拡大が課題となる。



天蚕卵の選別と袋詰め作業

3月20日(日) 総会に先立ち午後1時から16名参集し、天蚕卵7,000粒の袋詰め(約700袋)を行い、山付け作業の準備を整えた。

←青いメッシュの袋に卵を10粒入れる

飼育樹の剪定作業

2月27日(土) 飼育ハウスにおいて9名の会員が参加し剪定作業を行った。カミキリムシ虫による食害が進んだエゾノキヌヤナギや樹勢の低下がある飼育樹は併せて伐根したことからハウス5棟を改植することとした。

食害を受けたエゾノキヌヤナギの根株の中には3~4cm程のカミキリムシの乳白色の幼虫が散見され、防虫剤散布の時期、方法の検討の必要性を痛感した。

剪定作業の菅野保雄さん、菅野善正さん→



防虫剤散布作業

3月12日(土)、4月2日(土) 飼育ハウスにおいて3名の会員が参加し飼育樹(エゾノキヌヤナギ・クヌギ)の防虫剤の散布を行った。

カミキリムシによる根株やマイマイガによる樹葉の食害を防止するため重要な作業である。剪定時の課題解決に向け念入りに実施したところである。

散布作業状況→



山付け、ネット張り作業

4月24日(日) 会員13名で山付け作業とハウスのネット張り作業を実施した。女性会員は一袋に10粒入った種を飼育樹(エゾノキヌヤナギ)に山付けした。

昨年度に改植したハウス4棟が改植後間もなく大風に煽られ、防草シートが幼苗木を倒し痛める事が発生したので、山付けできないこととなった。このことから8棟のみに4,000粒を山付けし、後日2棟のナラ、クヌギのハウスに菅野会長、八島利幸、八島時男の各会員が実施した。



作業状況(ネット掛け)



(山付け) 川辺さん、石塚さん、



大友さん、八島さん

掛田小学校の養蚕指導を継続

6月2日(木)から6月末日まで、掛田小学校3年生の総合学習の一環として『養蚕』の講座を当会で担当している。昨年度より大石小学校が掛田に統合されたが、既に大石小では「蚕」に触れている生徒が多く、蚕の変態(卵⇒幼虫⇒蛹⇒成虫)のリサイクルを理解していた。6月2日から飼育を始め、6月末に蛹になる営繭過程を記録した。収穫した繭は成虫観察用に10個残して天蚕繭と同時に乾燥した。2学期に「紬」「真綿」体験、繭工芸品作りに利用される予定である。

総合学習状況(八島事務局長)→



繭の収穫作業

7月10日(日)午前9時より「館ハウス」で繭の収穫作業を行った。当日は参議院議員選挙日であったが会員16名が参加した。今年はハウス4棟が改植後間もなく強風により防草シートが煽られエゾノキヌヤナギの幼苗木を痛めてしまうという非常に残念な事態となって、収穫数減少は想定されていたが約1,000粒を収穫した。また、八島時男会員、島貫会員、鈴木会員、上田会員の繭を含め、総数で2,210粒の収穫であった。



繭を丁寧に選別する会員ら

繭1000個を丁寧に採集
りょうぜん天蚕の会
「りょうぜん天蚕の会」
は10日、伊達市霊山町にある天蚕の飼育ハウスで繭の収穫作業を行った。
県北地区の会員約40人が参加し、約千個の繭を丁寧に採集した。繭玉は乾燥させてアクセサリーなどの工芸品用や糸採集用などに選別される。同会の菅野秀一会長は「地域に伝わる天蚕の伝統や技術を大切にしたい」と話した。

← (令和4年7月19日 福島民友)

読売新聞が天蚕飼育活動取材

7月10日(日)午後、読売新聞福島支局の小沼聖美記者が当会の活動取材のため八島事務局長宅に来訪した。また、長野県御代田市の櫛田氏と二本松市の佐藤氏も来訪し、天蚕について説明を受けるとともに、八島時男会員のハウスで3齢から5齢の幼虫を観察した。櫛田氏と佐藤氏は学習指導を行っているので子供達を連れて成虫観察に伺いたいと希望されて成虫の観察用に生繭10粒を持ち帰られた。小沼記者の取材記事は7月17日の朝刊に掲載された。



櫛田さん 佐藤さん

小沼さん



↓ (令和4年7月17日 読売新聞)

やさしいもえぎ色の繭が、クヌギの葉にくるまるように枝先にぶら下がっている。「天蚕」と呼ばれる日本原産の蚕の繭で、屋内で飼育される「家蚕」の白い繭より一回り大きい。「きれいでしょう。身を守るため、木々に溶け込む色をしているんです」伊達市霊山町掛田の畑で、「りょうぜん天蚕の会」事務局長の八島利幸さん(86)が教えてくれた。紡がれた糸は、その美しい輝きと丈夫さから「繊維のダイヤモンド」と呼ばれる。会では天蚕を飼育し、織物や繭の加工品を制作している。



りょうぜん天蚕の会(伊達市)

が広がっていた。だが、養蚕業の衰退とともに荒廃し、八島さんが霊山町内に約3000mあった遊休地の活用による地域おこしを提案。これがきっかけで、2005年に会が発足した。会長の菅野秀一さん(71)が、「荒れさせるより、地域のなかに使ってもらえるなら」と土地を提供。いまでは約4000平方メートルの農地で、約40人の会員が協力

回収した繭から葉っぱやゴミを取り除く作業をする会員たち(10日、伊達市霊山町で)「りょうぜん天蚕の会」提供

飼育や繭回収皆で協力

して天蚕を飼育している。繭の整備から種付け、繭の回収、製糸……。作業はみんなで集まって行う。手を動かしながらのおしゃべりが、地域の大らかな交流の機会になっている。「良いやり方を工夫したり、日常の情報交換をしたりと、わいわいするのがとても楽しい。天蚕の様子を繭いた歌や踊りもみんなで作ったん

です」と、菅野さん。他の産地との交流や糸の専門家を招いた研修、機織りや繭加工の体験会など、技術継承にも力を入れている。

地域の小学校では、天蚕の飼育設備を設け、八島さんらの指導のもとで飼育・観察を行っている。最初は幼虫の姿に驚愕を上げていた子が、1か月後には「かわい」と喜んで手にのせるようになる。原発事故で屋外活動が制限されてから、活動は縮小したままだが、八島さんは「子どもたちは、本当は生き物に興味

津々。ふれあう機会を多く作ってあげたい」と話す。今月10日には、長野県御代田町から櫛田拓哉さん(48)が訪れ、回収したばかりの繭や、ハウスで育つ幼虫を見て回った。

櫛田さんは地元で、子どもが放課後の居場所作りに取り組んでいるという。人間は自然と共生し、循環する営みを行ってきたんだと実感した。自然から与えてもらうことの感動を、子どもにも伝えたい。目を輝かせた彼の言葉に、八島さんも菅野さんも大さうなうなずいた。(小沼聖美)

会存続へ若者参加期待

明治時代初期、会のある同市霊山町一帯は絹糸の一大産地として知られ、「掛田折り返し生糸」というブランドが海外にも輸出されていた。日本初の養蚕伝習所や、機織り技術の学校もあった。

天蚕は家蚕と比べ、育てるのも糸を引くのも難しいとされている。初代会長を務めた柳沼泰衛さん故人は、県蚕業試験場の元場長で、繭から糸をスムーズに



八島利幸さん(右)と、織物なを担当する若手女子さん

ためにも、魅力をPRして若い力を呼び出したいと話している。

「紬」の自主研修を実施

7月20日(水) 繭収穫作業終了後、女性会員数名が繭から1粒紬を実施した。継続して紬作りをしたい要望が募り、8月10日(水)、24日(水)の3日間、八島事務局長宅で電動フライヤーによる紬繰糸も合わせて実施した。それぞれ10グラムの紬を得ることができた。この紬が様々な織物に利用されるとともに、天蚕繰糸者の増加に繋がることが期待される。

たていとかけ そうこう 経糸掛、綜絞の研修会を開催

10月14日(金) 中川集落センターにおいて女性会員5名が集い経糸掛と綜絞の研修会を行った。講師は当会会員の石塚裕美さん。石塚さんは米沢で製糸の研修で技術を習得し、機織りを長年実践しておられる。八島恭子会員が補佐役を務めた。初心者向けとして綜絞の穴に容易に糸が通せるようにレース糸140本用いて経糸(幅約10cm)とした。スチール製の機織り機に経糸を掛けて参加者それぞれ2～3cm機織りを行い、一連の流れを体験した有意義な研修であった。

この研修会は新型コロナの流行のため中止となった「天蚕まつり」に代わるものとして、また、昨年実施した電動フライヤーによる紬ぎ研修がコロナ流行のため講師の下村輝氏が来福出来なくなったため、会員同士の交流の場を設けたいという要望に応えるものとなった。

また、泉原養蚕資料室に保管されている「足踏み式糸紬機」を「電動化」できないものか担当職員に見てもらい下村氏に相談したが、ガイド装置が不足しているのが不可能と診断された。



幅1cmに約10本の割合で糸を通す細心の作業 ↑

霊山町文化祭に天蚕製品協賛展示

11月5日(土)～6日(日) 霊山町体育館で恒例の霊山町文化祭が開かれ、当会の作品の展示を行い、菅野会長、八島事務局長、八島時男会員が説明に当たった。

コロナ禍であり、出展の活動団体数や来場者の減少も見られたが、当会の展示品には興味をもって見入る方が大勢おり、お褒めをいただいた。伊達市長の須田博行氏、市議会議員長の菅野喜明氏には長時間見聞いただき光栄であった。

天蚕品展示ブースと八島事務局長→



『絹の町 - 掛田』の街中探訪案内

9月17日(土) 当会会員高野金助氏が主宰する里山学校地域振興プログラムとして「掛田の街中探訪」を実施するに当たり、菅野会長と八島事務局長が案内役を務めた。

コースは①掛田折返しの揚げ返し処(金子町)②掛田蚕業伝習所跡(金子町)③菅野平右衛門氏の金蔵(金子町)④安田利作氏土蔵と掛田製糸所跡(新町)⑤阿部製糸所繭倉庫の石蔵(下屋敷)⑥佐藤友信氏代々の墓石群(中屋敷)⑦菅宇蚕館顕彰碑(中川)等を一つ一つ見学した。

特に、阿部製糸所の石蔵に入りその規模の大きさに驚くとともに保存状態が良く、参加者一同何とか後世に残したいとの声が聞かれた。また、菅野会長の先祖の功績でもある菅宇蚕館の数々の資料を整えて中川集落センターで説明後に顕彰碑を見学した。参加者からも多くの質問があった。掛田の大橋済(わたる)氏と並んで温暖育・全桑育による養蚕の普及に努め、地域の養蚕農家に潤いをもたらしたことが十分伺えた。

「きいとのもち - 掛田の歴史 - 」改訂版を県立図書館に寄贈



昨年、八島事務局長が前会長の柳沼泰衛氏から戴いた「きいとのもち - 掛田の歴史 - 」の改訂版を1年掛けて製作した。原本文章は誤記、誤植、史実誤認、脱字、欠字等が多く見られたので訂正して発行したもの。

(当会の「天蚕の会だより」第18号で詳細紹介)

この度、福島県歴史教育協議会の了解を得て『改訂版』としたもので、原本保管の県立図書館に2冊寄付して広く県民に読書の機会を与えるとともに「絹の町掛田」を広く県民に認識いただく機会とした。

母蛾検査を実施

11月13日(日)9時から中川集落センターにおいて会員15名が参加し母蛾検査を実施した。母蛾を「すりつぶし」伝染病原菌の有無を顕微鏡で検査するものである。今年の検体数は35体(昨年58)を検査したが疑わしい検体が1体確認された。この1体ほど明らかに病原菌を確認できた例は稀なことだと言う。今回の検査に大阪大学の高橋教授と学生の岡村さん、大原さんも参加された。大阪大学からは今年度取り組んだ天蚕の放射能検査の概要と鈴木静子会員が所有する浪江町の飼育樹木の放射能残留とそれを餌とした繭の残留放射能検査を実施する計画案が示された。



卵粉碎後の試液ろ過(上) 試液の整理(下)



顕微鏡検査

令和4年11月26日

←福島民報

伊達市内小学生に「繭工作」指導

11月8日(火)から3回(11月15日(火)、12月8日(木))に、今年度保原に建設された「簡易宿泊施設＝泊っぺ」を利用した伊達小・保原小5年生が「通学合宿体験活動事業」の夜間研修プログラムで「繭工作」が取り入れられた。八島事務局長は「天蚕繭花」づくりを始めるに当たり「伊達市の養蚕史」を説明した。生徒達からは「『保原町の入金真綿』が日本の伝統工芸品＝結城紬織物の原料になっていたとは知らなかった」とか「伊達地域の蚕種が日本の7割を占めていたとは驚いた」と感嘆の声が聞かれた。



「ふくしま絹の道シンポジウム」に参列

12月19日(月) 福島市の福島テルサにおいて上記が開催され、菅野会長、八島事務局長が参加した。養蚕関係の機関も多いことから当会の会員数名も参加した。

このシンポジウムは、観光庁が今年度から進めている「第2ふるさとづくりプロジェクト」モデル実証事業の一環として「福島市フルーツラインエリア観光推進協議会」主催によるもので、養蚕文化を観光振興に生かす事業として初めて開催されたものである。

上映された「シルク時空を超えて」では幕末期から現在に至る西欧と日本の養蚕の変遷が克明に編成されており感動する内容であった。日本では富田蚕種や関根真綿も紹介されている。

式後に映画監督の熊谷友幸氏を囲み会談の機会を得たところ、監督は「是非とも天蚕の飼育状況を観察しシルクの未来を図りたい」と申し立てられた。また、仙台市の織物業者等と懇談できたことは有意義であった。

推進協議会の実証事業として製造された「蚕の吻」入りビールやソーセージを「ふるさとづくり」の商品として紹介され配られた。試飲食後のアンケートにより改良を重ねるとのことである。

令和4年12月22日 福島民友→

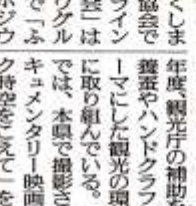
養蚕と観光可能性探る

福島で絹の道シンポジウム

福島市の道の駅くしまや市内の各温泉観光協会で行われる「市フルーツライン」エリア観光推進協議会は、19日、同市のキョウワグループ・テルサホールで、「くしまの道シンポジウム」を開き、市内外の約100人が養蚕文化への関心を高めた。

県内は東北地方を中心に養蚕が盛んで、協議会には中山高行さんや福島学院大の木材信綱教授がそれぞれ取り組みについて報告した。パネリストスキャッソンでは、「シルク時空をえて」の監督を務めた熊谷友幸氏を加え、県内の養蚕性を切り口に視察の可能性について意見を交わし、県外とつながって多くの人々を巻き込んだ動きに発展させていく重要性を確認した。

蚕沙や桑など使用来春に新商品発売
同協議会は、養蚕の副産物である蚕沙（蚕のふんなど）や桑などを使った商品開発に取り組み、試作品を完成させた。来春から道の駅へくしまで販売予定。
商品は桑の実や桑葉、蚕沙を使った発泡酒、桑の葉を練り込んだミルククリュームの「カイコパン」、桑の枝や実、葉を使ったお茶、蚕のサナギの粉末入り白濁高麗清湯豚のウインナー！



養蚕を切り口にした観光について意見を交わすシンポジウムのパネリスト

行先	往	伊丹	羽田	成田	那覇	札幌	仙台	東京	大阪	名古屋	福岡	沖縄
全日本	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
ANA	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
JAL	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
東亜	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
全日空	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
日本航空	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
国際線	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
国内線	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
国際線	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
国内線	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△

※予約状況は随時更新されます。詳しくは各航空会社のウェブサイトをご覧ください。

お問い合わせ先
FJA / KSA 福島県内観光振興センター ☎ 0570-029-232
KSC / AVEックスエクスプレス ☎ 0120-688-008

「放射能移行実証試験地」の樹木整備を支援

1月19日（木）鈴木静子会員が所有する浪江町の天蚕飼育場において、大阪大学高橋賢臣教授が「原発事故により汚染された樹木からどの程度天蚕・繭・糸に移行するか」の実証試験を行うため、菅野会長、八島事務局長、八島時男事業副部長がチェンソーを持参し伐採作業を支援した。高橋教授と研究生2名は仙台空港からレンタカーで現地に、また、三田村会員も駆けつけ、伐採木の片付けや整地を行った。原発事故後放置されたままのクヌギは樹径7～15cm、高さ10m程に成長し、樹木の周りや周辺は雑木・竹が繁茂し非常に難儀したが、4時間程で約4アールに45本の飼育樹木が確保できた。3月末にネット掛けを行う予定である。

伐採整地したヶ所の周りには昔ハウスがあって、鈴木さん一人で毎年3,000粒以上の繭を収穫したとのこと。竹雑木に絡まったキウイフルーツの枝を見ながら10数年前を顧みておられた。



伊達の魅力 - 歴史から探る！「伊達の蚕糸業」

1月21日（土）梁川小学校講堂において令和4年度伊達市歴史文化講演会があった。第1部は「仙台藩祖伊達政宗と伊達地方の深い関り」について伊達市教育委員会の職員から講話があった。

第2部の「明治の到来と伊達の蚕糸業」では、伊達地方の養蚕・生糸生産の技術が日本の近代化に大きく寄与したこと、養蚕家・蚕種屋（たねや）と呼ばれた人々のたゆまぬ努力や工夫について、そして重要文化財「伊達の蚕種製造及び製糸・養蚕関連用具」の紹介も含め、蚕糸業の様子を振り返るパネルディスカッションが行われた。

パネリストには伊達市長の須田博行氏、伊達市ふるさと大使の小林アリスさん、長沢 裕さん、高島英也さんの4名で、元県文化センター副館長の飯村均さんが司会を務めた。パネリストの4名はいずれも伊達市の生まれで幼い時から深く養蚕に関わっておられる方々である。

令和5年1月31日 福島民友→



伊達市歴史文化講演会
21日、同市梁川町の梁川小学校講堂で開かれた。同市出身で「伊達ふるさと大使」を務めるサッポロホールディングス（東京都）顧問の高島英也さん、タレントの長沢裕さん、女優・モデルの小林アリスさんが地元伊達市の歴史に思いを巡らせ、これからの発展を考えた。「伊達の魅力」歴史から探る「伊達」をテーマに、昨年12月に同市梁川町の史跡「伊達氏梁川遺跡群」へ「養蚕遺跡」と「岩地蔵遺跡」が追加指定されたことを記念して企画された。第1部では生涯学習課の職員が中世から現代までの伊達の歴史を紹介した。第2部では、元県文化センター副館長の飯村均さんが司会を務め、ふるさと大使の3人と須田博行市長が

ふるさと大使ら講演「新発想で伝えたい」

市は歴史的魅力と未来について語り合うパネル討論が行われた。

高島さんは「地域の伝統や文化を守る」と同時に、これまでの歴史でも行われてきた「生き生きとした地域の枠を超えた交流」が今後もさらに大事になると強く感じたと語った。

長沢さんは「子どもの頃に自然とふれあっていた生活が今でも自分の生活の軸になっている。地域の歴史を学ぶことで、自然と人間の共生を改めて考えた」と話した。小林さんは「教科書では書かない地元の深い歴史に触れることができた。どのようか、経験や新しい発想を生かしていきたい」と地元の可能性に期待を寄せた。

講演に耳を傾けた来場者は地元の歴史と文化に理解を深め、魅力を再発見していた。

伊達の歴史知るほど魅力

会員の活動スナップ



繭収穫作業 飼育樹エゾノキヌヤナギのハウス



繭収穫後の葉枝等の塵取り分別の作業状況



経糸掛け、綜紵の研修後の機織り実践



霊山町文化祭における天蚕展示ブース



母蛾検査 検体に試液を入れ「すりつぶす」粉碎作業



掛田小学校3年生の総合学習繭工芸の様子



浪江町天蚕飼育場の整備 雑木竹の刈払い後のクヌギ伐採



天蚕卵の袋詰め作業 青のメッシュ袋に10粒入れる

「日本野蚕学会報」に当会活動が掲載

令和4年3月発行の「日本野蚕学会報 No. 88 2022. 3」に令和3年11月27日に当会で開催した「紬糸研修会」の様子が掲載されました。この「紬糸研修会」については当会だより第18号で報告しておりますが、下記の通り学会報全文を添付します。
(学会誌表紙はカット編集しています)



最近の話題

りょうぜん天蚕の会 紬糸研修会を実施

りょうぜん天蚕の会 会長 菅野 秀一
事務局長 八島 利幸

伊達市霊山町は、明治初期には横浜からの輸出ブランド品「掛田折り返し生糸」で全国に知られ、また日本最初の私立蚕業伝習所がこの地に発祥した歴史をもっています。しかしながら、今日の養蚕業は農産物の国際化の波にいち早く押され、かつて地元経済を大きく潤した面影が忘れ去られようとしています。

私たちは、日本の原種である「天蚕」の飼育を契機に、この霊山にある誇るべき歴史を振り返るとともに、これを地域資源として活用することを願って、平成17年2月に有志40余名が集い「りょうぜん天蚕の会」を結成しました。以後、霊山の豊かな自然環境を活かし、野蚕である「天蚕」の育成と、その飼育体験交流や独特の風合いをもつ萌葱色の繭・絹糸の新たな加工や商品化による地域特産品の創成をはかり、活力ある地域づくりを推進するため、会員一丸となって繭の生産、新商品開発に取り組むとともに、小学校等への観察用天蚕配布、県内外天蚕関係者との交流及び展示PR活動等を行っております。

当会はこの度結成18年目を迎えましたが、これも偏

に日本野蚕学会、大日本蚕糸会、伊達市、伊達市観光物産協会、福島県関係機関等のご支援の賜と厚く御礼申し上げます。

令和3年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため例年行ってきた「天蚕まつり」をメインとする各種行事は中止や縮小をせざるを得ませんでした。天蚕の飼育に関する作業と活動は会員の努力により実施して参りました。ここにその1つ「天蚕真綿紬糸の研修会」を紹介します。

11月27日（土）伊達市霊山町の中川集落センターにおいて、講師に京都より、下村ねん糸の下村輝氏とその仲間の染織家・竹内禮子氏を迎え、当会会員15名をはじめ、岩手、宮城、山形（米沢織）、福島、茨城（結城紬）、栃木の各県の養蚕家、真綿製造業、製糸、織物に携わる約40名が参加され体験実習されました。

まず、竹内氏から、繭のずり出し方式の解紬方法について指導をいただきました。1リットルのお湯（70℃）に5gの割で重曹を溶いた液に繭を浸し、2時間ほど密封した後、密封を解き、糸のずり出し引きを体験。密封する容器は特殊なものではなく、ポットのような水温を一定に保持できるものであれば良いとのこと。引き続き下村氏から、天蚕繭の真綿作りと持参された電動式真綿紡ぎ機（フライヤー）で真綿紡ぎ方について指導をいただきました。繭を袋に入れ酵素精練

された個々の天蚕真綿から糸を50cmほど引き伸ばし、指をすりながら離していくと機械の回転で撚りが掛り、糸を機械へと引き入れると、天蚕真綿糸は木管に自然に巻取られます、再び50cmほどを引き伸ばす事の繰り返しで天蚕真綿糸は連続して糸糸になり、最年少参加の小学生が簡単に天蚕真綿糸を紡いだ時には拍手が起こりました。また、市販の家蚕繭の袋・角・帽子の真綿の真綿糸作りの体験実習では、真綿の中心に穴を開け両手で大きくサークル状に引き伸ばし、久米島式の用具に掛けて糸つむぎをする方法は、その手法の簡易さと速さに皆感動したところです。

当会は天蚕の採卵、飼育、繭加工、製糸、機織まで一貫した作業活動を行っていますが、その中でも特に繭の「解紬」と「真綿作り」と「糸つむぎ」方法について確たる要領が無く、古来よりの一粒繭ずり出し手つむぎ技法による糸作りで、省力化の機器に乏しく苦慮していたところでありましたが、この度の「天蚕真綿糸の研修会」はその課題解決に大きく寄与したところです。今後、この技術を共有し研鑽しながら更なる活動を進める所存です。



各地の糸系作業実施例をビデオ鑑賞する参加者



八島事務局より講師紹介 竹内禮子氏(中)下村輝氏(右)



「電動フライヤー」での天蚕繭と家蚕繭の糸系実習



真綿を引き伸ばし「電動フライヤー」に導く



天蚕繭の解紬方法を学ぶ様子



真綿の引き伸ばし方法を説明する下村輝氏

(学会誌は2頁とも白黒ですが、写真だけカラーにしました)

読者が選ぶ県内十大ニュース

- 1 只見線 11 年ぶり全線再開
- 2 若隆景が初優勝
- 3 聖光、甲子園初の4強
- 4 県産酒9回連続日本一
- 5 いわきJ3優勝、J2昇格
- 6 本県沖で震度6強地震
- 7 内堀氏が知事選3選
- 8 県内コロナ感染過去最多
- 9 只見が初の甲子園
- 10 大雨で磐越西線の橋梁崩落

令和4年12月15日 福島民友

トピックス

96歳 歴代最長 在位70年
エリザベス英女王死



チャールズ王とカミラ王后

令和4年9月10日 福島民友

福島、宮城で震度6強

津波注意
本県沖震源 M7.3推定 第一



令和4年3月17日 福島民友

若隆景 初優勝

決定戦 高安破
本県出身50年



大相撲春場所
新関脇1勝3敗
場所中

令和4年3月28日 福島民友

若元春 小結昇進 県産日本酒9連覇

兄弟同時三役31年ぶり

金賞17銘柄、日本一



令和4年12月27日 福島民友

知床10人死亡確認

観光船に県人乗船
不明16人搜索続



海保業務致死客疑全

令和4年4月25日 福島民友

安倍元首相撃たれ死亡

演説中背
殺人未遂容疑 41歳男



67歳首相在職最長3188日

令和4年7月9日 福島民友

聖光 初の4強

県勢51年ぶり 磐城以来



夏の甲子園
1000301005
50040100X10

令和4年8月19日 福島民友 号外

東北、北陸に記録的大雨

JR磐西線鉄橋
北塩原の集落一吐



54万人、17河川氾濫、土砂災害11件

令和4年8月5日 福島民友

県南会津新3区選
本県 定数1減

衆院10増10減成立



令和4年11月19日 福島民友

いわき優勝 J2昇格

県勢初の達
J3参入1年目



令和4年11月7日 福島民友